

## 「道徳教育の研究」の研究

—— 麻生誠はなぜデュルケム『道徳教育論』を訳したのか？（Ⅰ）——

神戸大学 山内 乾史

### 抄 録

本稿（ないしは本稿に続く論稿）は、日本を代表する教育社会学者の一人である麻生誠（1932-2017）がデュルケムの『道徳教育論』をなぜ訳したのかを探ることを通じて、現代の道徳教育に求められる内容、教育方法を探ることを企図するものである。本稿では第一回として、麻生誠の人物像を描き、またデュルケム『道徳教育論』の概要について述べ、さらに日本の教育社会学者にとって「道徳教育の研究」がどのような意味を持つのか、その中で麻生誠が『道徳教育論』にいかなる思いを託して訳したのかの手掛かりを探った。

Key Words：道徳教育，自律性，規律，デュルケム，麻生誠

### 1. はじめに

本稿（ないしは本稿に続く論稿）の目的は、日本の教育社会学者である麻生誠（1932-2017）が、なぜ E. デュルケム（Émile Durkheim 1858-1917）『道徳教育論（*L'éducation morale*）』（1923）を訳したのかを探ることを通じて、同書の今日的意義、「道徳教育の『教育社会学』的研究」の意義を探ることである。

とくに、本稿（ないしは本稿に続く論稿）では「道徳」ないしは「道徳教育」の一般的な学説史的、哲学的、歴史的考察ではなく、現在の日本の学校教育においてデュルケム『道徳教育論』がどのような意味を持つのかという点に主として限定して考察することとする。すなわち、優れた古典としてだけでなく、今なお生きている学術書としてどのように受容するのが望ましいのかを検討するというわけである。

小学校では2018年度から、中学校では2019年度から「**特別の教科 道徳**」がスタートする。教科化にあたり、道徳の意味、道徳教育の意味を問い直すうえでも、今、デュルケム『道徳教育論』の訳業の今日的意義を考察することは一定の意義を有するであろう。

### 2. 麻生誠とは

麻生誠は日本の教育社会学者である。麻生の師で、フランス社会学に造詣の深い清水義弘（1917-2007）はわが国の教育社会学の基礎を築きあげた人物である。清水は旧制福岡高校（文丙）を経て東京帝国大学文学部で社会学を学び、のちに教育社会学に取り組んだ、いわゆる「第Ⅰ世代」であるが、麻生は学部生時代から教育社会学を学んだ、いわゆる「第Ⅱ世代」を代表する研究者である。

ちなみに、この第Ⅰ世代には二系統ある。加

野芳正 (1984) によれば, 「旧帝大系で設立時の教育社会学講座を担当したのは, …といった社会学出身の人たちである。彼らの多くは本家社会学講座との併任という形態をとった。他方, 高等師範・文理大系の東教大と広大では, 教育学からの人材が豊富であったせいか, あるいは社会学講座がなかったためか, 哲学的色彩の濃い教育学を母体として生成・発展していくことになる (傍点は加野による)」ということである。つまり, 「一般に教育学を母体とした東教大や広大では教育現場 (特に学校教育) に密着し, 教育実践への貢献を意図した研究が多い。…他方, 帝大系の特色は, 学校教育そのものよりも, むしろ周辺部から比較的マクロな視点を持って眺める点にある」ということなのである。

教育社会学は, 社会学の一分野ではあるが, 他の「連字符社会学」(例えば, 都市社会学や家族社会学)とは異なり, 単なる一分野であるだけではない。文学部社会学科ないしは社会学部など「親元」から引き離されて, 文学部教育学科ないしは教育学部などに「養子」に出されて, 親学問である社会学とはかなり異質な発展形態をとる。その特徴の一つが加野も指摘する「教育現場 (特に学校教育)」への密着である。かつては特に高等師範・文理大系の研究者に顕著と言われた。もっとも, 現在では旧帝大系の出身者でも, 「学校臨床社会学」に見られるように現場密着の姿勢は広く見られるようになり, 逆に筑波大・広島大の出身者にも社会的な理論的考察を行う者もいる。時代は変わったと言えよう。ただ, いずれにせよ, 旧帝大系の研究者には, 概して社会学への思い入れが強く, 学問的なアイデンティティも教育学ではなく社会学にあるという研究者が年配の世代には多かったことは事実であり, 麻生もその代表的な一人である。

麻生は1932年3月30日に東京都に生まれ, 東京教育大学附属高校, 東京大学教養学部文科

Ⅱ類 (当時は文科Ⅲ類と理科Ⅲ類はなかった), 同教育学部, 同大学院人文科学研究科, 日本育英会専門員を経て, 東京学芸大学講師となる。その後大阪大学人間科学部で教鞭をとり, 放送大学副学長, 東京女学館理事長, 東京女学館大学学長を歴任し, 75歳で退職する。

麻生の祖父の麻生正蔵 (1864-1949) は成瀬仁蔵 (1858-1919) とともに日本女子大学校 (現, 日本女子大学) の創設に尽力した人物である。麻生は生誕前に銀行員の実父と死別した。そのため, この祖父が親代わりを務めたのである。日本女子大学校においては成瀬が初代校長を務めたが, その没後, 祖父正蔵が1919年から1931年 (すなわち麻生の生誕前年) まで第二代校長になっている。その関係で麻生は弱冠32歳で1964年より日本女子大学の評議員を, 1974年より同大学の理事を逝去直前まで長く務め, 同大学より名誉博士号を授与されている (2012年6月)。2017年4月24日に肝臓がんのため永眠した。享年85歳である。

なお, 麻生は幼少期の頃について2007年に執筆した「大学研究者の履歴書」で下記のように記している。

1932年3月に東京に出生, 銀行員だった父が私が生まれる前に死去し, 母も実家に帰ったため, 祖父 (日本女子大学創立者の一人) のもとで叔父一家とともに幼少期を過ごした。家庭的に不幸な幼少期を送ったわけであるが, 家父長制の厳しい時代であったから長男の長子であるということで大事に育てられた。

教育者だった祖父は, 孫の躰に厳しく隣家に住む日本女子大学の助手をしていた叔母の教育のもとに育った。叔母は素封家の娘で日本女子大学卒業後助手をしていたが, 私の面倒をみるために専業主婦となって, 私の養育に力を注いでくれた。幼稚園嫌いの祖父の反対で, 私は幼稚園には行かなかった。

昭和一桁世代においては、幼稚園に行かなかった者は少なくなかったようではある。少し時代は下るが、1948年の幼稚園就園率は7.3%である。ただ、実父が早逝し、実母が実家に戻るという事情の中で、今日の若い世代の家庭環境とは相当に異なる。このような環境の下で、独特の教育観をはぐくむようになるのである。

この祖父については、もう少し踏み込んだ形で麻生（2010a）において示されている。

私の親代わりであった祖父は、一九一八（大正七）年に大学令が公布された際、**盟友と二人して命がけで女子大学を創設しようとしたのだが、女子が対象であるという理由だけで大学として認定されなかった**。祖父はその悲しみと苦しみをずっと引きずっていた。生まれる前に父と死別していた私は、親代わりだった祖父の思いを、幼少の頃から体で感じ取っていたのかもしれない。祖父のルサンチマンを素直に受け継ぎ、教育を学ぶこと、とくに高等教育に関わることによって祖父の無念を少しでも晴らしてやりたいという、今考えると奇妙な感情から教育学部を選択したのである。（太字は山内による）

昭和期を代表する社会評論家、大宅壮一（1959）によれば「…この告別講演で、成瀬は、創立以来の忠実な補佐役をつとめてきた麻生正蔵を後任に指名した。…（中略）…昭和六年、**大学昇格失敗の責任を追うて麻生校長が退き…**（太字は山内による）」とある。ルサンチマンとはこのことなのであろう。ここで言う「大学昇格失敗」とは『図説 日本女子大学の八〇年』（1981）によれば、1923年に女子総合大学設立の募金趣意書を発表し、1927年に高等学部予科を開設し、さらに1930年に高等学部本科を開設したのだが、しかし、「女子総合大学に対する理解が一般的にみて未だ熟さず、時期尚早であった」ため、この「大学制度による入学者

は、四回生で打ち切りとなった」のである。そして1931年より高等学部学生の募集を中止し、4月に高等学部廃止の責任を取って祖父正蔵が辞任するといういきさつである。

しかし、一方で麻生（1991）には次のような記述もみられる。

私は2・3日迷ったあげく、教育学部教育学科に進学することに決めた。その理由は一つは個人的なこと、いま一つは自分の将来と日本の将来を教育に懸けてみようと思ったからであった。このような青くさい決意が、幻想ではなく、賭けとして認められた時代であった。

この「個人的なこと」がルサンチマンなのであろう。ルサンチマンと同時に「青くさい決意」、すなわち夢、希望、期待を胸に秘めて麻生青年は教育学部に進学したのである。以上、少し屈折した、アンビヴァレントな思いをはらむ教育観と教育へのスタンスがデュルケム『道徳教育論』の訳業とどう関係があるのだろうか？この点は本連載の最後に考察したい。

ところで、研究者としての麻生は若い頃よりエリート教育の研究で知られていた。1967年に福村出版より刊行された『エリートと教育』はその代表作である。当時まだ35歳だった麻生は学会の注目を集める。その後、第14期中央教育審議会にかかわり、才能教育の研究を本格的に始め、「飛び入学制度」の導入にも尽力する。この領域の代表作は、1997年に玉川大学出版部より刊行された麻生誠・岩永雅也編『創造的才能教育』である。さらに生涯教育論、生涯学習論の研究でも知られ、放送大学では授業も担当した。麻生誠『生涯発達と生涯学習—豊かな生涯学習社会をめざして—』（1993年、放送大学教育振興会）がそのテキストである。これら麻生が種をまいたエリート教育、才能教育、生涯教育（学習）の研究については、麻生

の後輩や教え子によって十分に継がれたとは言い難い面がある。しかし、麻生が望まない形にせよ、不完全にせよ、麻生の研究を受けて継承、発展させようとした者が出てきたことも事実である。ところが、麻生自身も、麻生の後輩や教え子もほとんど顧みない麻生の業績がある。デュルケム『道徳教育論』の訳業である。

社会学の祖は、一般的にコント、ウエーバー、デュルケム、ジンメル、パレート、さらにはスペンサー、マルクスなどが挙げられるが、こと教育社会学に関しては、これら錚々たるファウンディング・ファーザーのうちデュルケムの影響が極めて大きい。デュルケムの代表的な著作としてはいわゆる「四大著作」、すなわち、『社会分業論 (*De la division du travail social*)』(1893)、『社会学的方法の規準 (*Les règles de la method sociologique*)』(1895)、『自殺論 (*Le suicide : Étude de sociologie*)』(1897)、『宗教生活の原初形態 (*Les formes élémentaires de la vie religieuse*)』(1912)が挙げられる。麻生はデュルケムを「生涯の師」(麻生(1995b))と仰ぎ、デュルケムの諸著作については熱心に研究していたようであるが、『道徳教育論』を含めデュルケム自身に関する論考はほとんどない。東京大学大学院教育学研究科、教育社会学講座の二年後輩である山村健(1933-2008)との共訳『道徳教育論』、および、原田彰(1937-)、宮島喬(1940-)との共著『デュルケム 道徳教育論入門』の二冊に過ぎない。驚くことに日本全体でもデュルケム『道徳教育論』と銘打った単行本は、管見に入る限り、これらのみである。しかも明治図書より刊行された共訳書は半世紀以上前、原田・宮島との共著書は40年以上前の刊行で絶版になって久しい。現在新刊で入手可能なのは講談社学術文庫版の共訳書(明治図書版の復刊本)のみである。

なお、上述の原田彰は、清水義弘とともに日本の教育社会学の基礎を築いた新堀通也(1921-

2014)の高弟で同志社大学、広島大学等で教鞭をとった。新堀は『デュルケム研究—その社会学と教育学—』(1966年、文化評論出版)等によって、「デュルケムの教育論」研究でも知られているが、原田はその後継者に当たるわけだ。他方、宮島喬はお茶の水女子大学、法政大学等で教鞭をとった、わが国におけるデュルケム研究の第一人者であり、『自殺論』の訳者として広く知られる。

麻生は大阪大学において、教職課程の「道徳教育の研究」という授業を担当していた。筆者自身も受講した(1986年度)が、最初から最後までデュルケムの話ばかりであった。しかし、なぜ麻生がデュルケム『道徳教育論』に注目し、訳業に取り組んだかについては全く語られることはなかった。また学部の講義、演習、大学院の講義、演習においても、筆者との個人的会話においても語られることはなく、周囲の先輩方も関心を持っていなかったようである。インフォーマルなフランス語文庫の読書会でも、もっぱらギユルヴィッチの難解極まりない『社会決定論と人間の自由 (*Déterminismes sociaux et liberté humaine: Vers l'étude sociologique des cheminements de la liberté*)』(1955, Presses Universitaires de France)を講読し、デュルケムを読むことはなかった。

しかし、意外と言及されないけれども、「麻生誠」の名を関した数多くの著作のうち、最初の著作が山村健との共訳『道徳教育論』であり、最後の著作は講談社学術文庫の一冊として再刊された『道徳教育論』である。まさしくデュルケムに始まりデュルケムに終わった研究者人生であり、『道徳教育論』に始まり『道徳教育論』に終わった研究者人生だったのである。32歳の若さで第二外国語であるフランス語の翻訳書、それも大家デュルケムの翻訳書で出版界デビューとは、現在なかなか考えられないことである。四半世紀にわたり教えを受けた

者の一人としてこのことの意味を考察する必要があると考える。

私事ながらこれと関係することを述べさせていただきたい。麻生は2007年3月末をもって（日本女子大学理事等の役職を除いて）教員・研究者としては退職した。その時に麻生の主たる業績（過去の絶版になっている業績を含む）で重要なものを文庫本ないしは新書形で復刊しようという声が弟子筋の間から起こった。その時に候補に挙がり、現に講談社学術文庫から刊行されたのが『日本の学歴エリート』だった。原著は1991年に玉川大学出版部より刊行されていた。麻生の最初の単著は既述の『エリートと形成』であるから、やはりエリート教育の研究者として、自分の成果を残しておきたかったのである。岩永雅也（放送大学）、木村涼子（大阪大学）両氏と筆者が主として校正を担当し、2009年12月に刊行された。その労に対して麻生夫妻が東京丸の内のレストランで宴席を設けられた。2010年3月末のことである。岩永、木村両氏、それから講談社の阿佐信一氏、筆者の4名が招かれ会食した。筆者にとっては、その会食が麻生との最後の直接の対面の機会となった。

そのしばらく後、2010年4月に、講談社より小包が届いた。何かと怪訝に思い、帯を解けば『道徳教育論』である。今にして思えば、麻生は、自らの数多くの生涯にわたる業績（しかもそのほとんどは絶版品切れになっている）を振り返って、「エリート教育の研究」と「デュルケムの訳業」を後世に遺すべき仕事、遺すことのできる仕事として文庫化したかったのだ。同書には、麻生としては極めて珍しく「デュルケム・ルネッサンスを！の願いを込めて、謹呈いたします。二〇一〇年五月一二日 麻生誠」と熱い献辞が付けられていた。それだけ深い思い入れがあったのであろう。

「CiNii Books」で「道徳教育論」というタイ

トルで検索すると86件がヒットするが、その中で最も所蔵図書館が多いのが麻生・山村共訳（1964）の旧版『道徳教育論』で304館、ついで麻生・山村訳（2010）の文庫版で226館である。前者は『世界教育学選集』に入れられたこともあり、学術的に重要であるばかりではなく、商業的にも成功したのであろう。思い入れはかなり深かったはずである。

脱線したけれども、社会学の祖、教育社会学の祖として言及される機会のきわめて多いデュルケムではあるが、『道徳教育論』については「四大著作」ほどには言及されていない。もちろん皆無ではなく、後掲の「引用・参考文献」にみられるように少なからず見受けられる。近年においても平田文子（2017）、森田美芽（2018）のような研究がみられることは付け加えておかねばならない。

だが『道徳教育論』はデュルケムの他の著作ほどには言及されないのはなぜだろうか？また、それをなぜ麻生誠は訳したのか、なぜ先述のような熱い思いを抱いたのか。そしてなぜ、その思いを十分に語ることなく逝去したのか。この問題を考察することが本稿（ないしは本稿に続く論稿）の目的である。

### 3. デュルケム「道徳教育論」の要諦

まず、最初にデュルケム『道徳教育論』の内容を概観しなくてはならない。

『道徳教育論』はデュルケムのソルボンヌ大学における1902年から1903年にかけての講義録を彼の死後、弟子たちが公刊したものである。デュルケムは1917年に没するが、1922年に『教育と社会学（*Éducation et sociologie*）』、1925年に『道徳教育論』、1938年に『フランス教育思想史（*L'éducation pédagogique en France*）』と教育関係の重要著作が相次いで刊行された。いずれも講義録であり、デュルケムの高弟ポール・ファコネ（Paul Fauconnet）、モーリス・ア

ルヴァクス (Maurice Halbwachs) たちの労による出版である。今日、われわれ教育社会学者がデュルケムの教育論に学ぶことができるのは、全面的にこの高弟たちのおかげである。

そもそもデュルケムがなぜ道德教育を考察の対象として取り上げたのであろうか。それはフランスが歴史の大きな転換点にさしかかっていたからである。つまり、王制から共和制への移行に際して、カトリック教会の宗教道德から、教会とは切り離された世俗化した学校において、国家の責任において、世俗的道德の教育を「全国民に共通する普遍的な課題として、公教育の場で行われねばならない…それは教育の世俗化の基礎理念でもあったのだ」(麻生・原田・宮島 (1978)) ということなのである。

ユダヤ教教師の子に生まれたデュルケムにとって、宗教は生涯にわたる研究対象であった。主著『自殺論』も『宗教生活の原初形態』も宗教と深いかわりを持つ。教会が支配する宗教道德からの解放に伴いそれに代わるものとして、何を世俗的道德として教え学ぶべきかを考察したのが『道德教育論』である。

デュルケムの『道德教育論』は「開講講演教育学と社会学」、第一講「世俗的道德」に続いて、二部からなる。第一部は「道德性の諸要素」と題する、いわば理論編であり、第二部は「道德性の諸要素を子供の内部に確立する方法」と題する、いわば実践編である。麻生・山村訳 (1964) に付された「解説」によれば第一部は「道德そのものの社会学的分析」、第二部は「固有の意味における教育学的問題にかかわるもの」である。

第一部は次のような構成を取る。

- 第二講 道德性の第一要素—規律の精神
- 第三講 道德性の第一要素—規律の精神 (続)
- 第四講 道德性の第一要素—規律の精神 (完) / 道德性の第二要素—社会集団への愛着
- 第五講 道德性の第二要素—社会集団への愛着

(続)

- 第六講 道德性の第二要素—社会集団への愛着 (完) / 二つの要素の関係と総括
- 第七講 道德性の二要素に関する結論と道德性の第三要素—意志の自律性
- 第八講 道德性の第三要素—意志の自律性

第二部は「その一 規律の精神」と「その二 社会集団への愛着」から成り、次のような構成を取る。

その一 規律の精神

- 第九講 規律と子どもの心理
- 第十講 学校の規律
- 第十一講 学校における罰
- 第十二講 学校における罰 (続)
- 第十三講 学校における罰 (完) と褒賞

その二 社会集団への愛着

- 第十四講 子どもの愛他主義
- 第十五講 学校環境の影響
- 第十六講 学校環境の影響 (完) / 科学教育
- 第十七講 科学教育 (完)
- 第十八講 芸術的陶冶と歴史教育

明記されているわけではないが、筆者が受講した「道德教育の研究」の授業内容や麻生・原田・宮島『道德教育論入門』の内容、また山村 (1979) の内容から判断して、麻生は第一部を主として訳出し、山村が第二部を主として訳出したのではないかと推測する。『道德教育論入門』において麻生は第Ⅱ章「道德教育論 (1) —道德教育の原理—」と題して、第一部、すなわち理論編の解説を担当している。ただし、大変残念なことに、この章は麻生の言葉で語られているのではなく、麻生がデュルケムの言葉をまとめたものである。適切な要約ではあるが、麻生自身の言葉を聞きたかったと考えるのは筆

者だけであろうか。

同章の末尾には下記のような文言が記されている。

[あとがき] 本章では、デュルケムの『道德教育論』（麻生誠・山村健訳、明治図書刊）の第一章を、私自身デュルケムになったつもりで簡明に表現しようとした。そのため、第Ⅲ章とはスタイルが異なったものとなった。もともと原文は、彼の講義草稿をもとに編まれているため冗長な箇所が多く、解りにくい点が多かったので、このような方法によってデュルケムの思想をわかりやすく伝えようとしたのである。

「師」の言葉に余計な注釈を加えるのは僭越あるいは不敬とでも麻生は考えたのであろうか？ 今となっては永遠の謎になってしまったという他ない。

ところでデュルケムに限らず、社会学者の基本的なスタンスとして、社会はただ単なる個人の総和ではなく、個人には還元できない別物であり、したがって個人の内面を分析しても社会の分析はできないというスタンスがある。もちろん、心理学固有の役割を否定するものではなく、それどころか教育の科学として心理学は重要である。しかし、心理学のみでは不十分であり、社会学の果たすべき固有の役割があるとデュルケムは考えるのである。

なぜなら、**学校は若い世代の組織的な社会化を図る機関であり、そして、その社会化の機能の一つに「世俗的道德」について学ぶことが含まれるからである。**

デュルケムにとっては、一人孤立した状態では道德という概念は生まれえない。したがって、「道德」あるいは「道德教育」は優れて社会学的な概念であり、社会学の方法による分析を必要とするのである。デュルケムによれば、道德的目的とは社会を対象とするものであり、道德

的行為とは、集团的利益のためにふるまうことになるということなのである。

したがって、デュルケム『道德教育論』は道德を規範的に考察したものではなく、「道德の科学（モラル・サイエンス）」を目指し、道德教育の社会学的分析を目指したものである。

デュルケムの『道德教育論』に対して投げかけられるステレオタイプの批判として、既成の価値観や規範を内面化するものであり、保守的であるとの批判がある。しかし、それはデュルケム『道德教育論』の誤読であろう。この点に関して、「道德性の第三要素—意志の自律性—」が重要になってくる。「道德性の第一要素」とは個人の外にある規律であり、「道德性の第二要素」とは社会への愛着である。

麻生が「デュルケムになったつもりで」述べるところでは、第一要素と第二要素は下記のようなになる（麻生・原田・宮島（1978））。

社会と個人との道德的關係が成立するには、まず第一に、社会は、絶対に諸個人の単なる集合へと還元されてはならない。なぜなら、各個人の個々の利益が道德的性格を持っていない限り、そのような個人的利益の集合は、いかに多数に上るとも、それ以上の意味は持ちえないからである。社会が道德的行為の目的となりうるためには、社会は固有の性格を、すなわち、その成員の人格とは異なる独自の人格を持たねばならない。かくして道德は、人間を個人的利益の範囲を超えた超個人的目的に結び付けることができるのである。

だが、以上の条件のみでは十分ではない。それに加えて、人間が自ら社会に愛着し帰服することが必要である。もしも社会が、単に個人以外の者、私たちに無関係のもの、という点で区別されるのであれば、社会への愛着は説明されないであろう。実際、ある存在への愛着とか帰服とかは、ある程度自己を対象と混同し、それ

と一体化し、さらには、それが自己犠牲にまで発展する場合には、己れを対象の身代わりに供しうる状態にまで至るものだ。

それに対して第三要素は次のようになる。

…合理化された道徳は、それが宗教的基盤に支えられている限り、論理的にどうしても免れえなかった旧套墨守から解放される。道徳をもって永久不変の法と解するならば、当然、それは神の表象として捉えられることとなる。だが反対に、私が立証しようとしたように、道徳が、ひとつの社会的機能を構成するものであるならば、それは、社会が持つ相対的普遍性と相対的可変性とをこもごもに分析することになる。かくして、論理的に言って、合理的道徳の内へののみ正当な地位を占めることができる道徳の一要素が、ここに新たに登場してくるのである。

…私たちは、この道徳の第三要素を、道徳を理解する知性 (*l'intelligence de la morale*) と呼んでおこう。もはや、道徳性は、単にある特定の行為を全うすることにあるのではない。さらに、その命令された行為が自由意志によって求められること、つまり、自由意志によって受け入れられることが必要なのである。

長い引用となったが、第三要素では宗教道徳から世俗的道徳への転換ということに関して、道徳に対してただただ受動的なばかりでなく、能動的な主体として、自律的な社会の構成員としての人間が描かれている。この点を見逃してはいけぬ。

第二部においては、これら「道徳性の三要素」のうち第一要素と第二要素について、実際の学校教育、教室内での実践について考察が深められている。第三要素に対応する箇所はない。第一部においても第一要素と第二要素に割かれた紙数に対して第三要素に割かれた紙数は

かなり少ない。

概して、『道徳教育論』の第一部は評価が高く、第二部はそれと比較して、やや評価が低いように見受けられる。その理由は、当時発展途上にあった心理学の知見を前提にして、心理学に対する批判、社会学の独自性、重要性を説くという基調への批判が大きいように考えられる。また教室内の人間関係の捉え方についても問題があるとの批判が多い。

もちろん、デュルケムの没後100年を経過した現在、『道徳教育論』発刊時には生誕したばかりだった社会学も、もちろん、心理学、教育諸科学もその後の100年間で大いに進歩し、議論の前提が変化している。そして教育内容と教育方法においてもめまぐるしい変化があったことも事実である。しかし、そういった変化を考慮しても、道徳の社会学的考察の嚆矢として『道徳教育論』の重要性は些かもその価値を減じないものと考ええる。「道徳」、「道徳教育」が社会学的概念であり、しかもデュルケム社会学における中心的概念であるという事実には変化がなく、心理学や教育諸科学において十分に顧みられない視角からの「道徳」、「道徳教育」論は社会の考察にとって欠かすことのできないものである。そこにデュルケム『道徳教育論』の不変の価値、不朽の価値があると考ええる。

なお、第二部の意義については次回以降詳述するが、一言だけ述べておく。つまり、第一部が極めて抽象的で難解であり、第二部の具体的な実践編があって第一部が理解可能になるとも言えるのであり、その観点から第二部の役割を再評価すべきものと考ええる。

#### 4. 日本の教育社会学者は「道徳教育」をどう捉えるか

概して、教育社会学者にとっては「道徳教育」は縁遠い分野である。一般的にも、「道徳教育」の研究はピアジェ、コールバーグ、ギリ

ガン、リバーマン等の心理学者（発達心理学者、教育心理学者、認知心理学者）や、あるいはカント、ヒューム等の道徳哲学者、倫理学者の手によって推進されてきたものと受け取られている。もちろん、心理学者の場合は一コールバーグの発達段階論に典型的に見られるように、「道徳性の発達」に主たる関心があり、道徳哲学者の場合には一カントの「定言命法」、「仮言命法」に典型的にみられるように一「道徳」、倫理そのものに主たる関心があるのももちろんである。最も深く「道徳教育」の研究に携わってきたのは哲学者たちの中でも教育哲学者たちであろう。日本の場合、松下良平（1959）がその代表的な存在である。「教育の実証科学」を志向する教育社会学にとって、教育哲学は対極的な存在に近い。

こういった、心理学的、哲学的、教育哲学的アプローチと社会学・教育社会学のアプローチとは相いれない面をもち、教育社会学者はなかなか道徳教育の問題を積極的に扱おうとしないのである。

具体的に述べるならば、社会規範は研究の対象としては魅力的ではあるが、「道徳教育」に対する誤ったイメージ、すなわち「規範の内面化＝価値の押し付け」という歪んだイメージが一部のマスコミや社会運動家によって喧伝されるくらいがあったことも事実であり、ペダゴジーのいわゆる「べき論」を忌避し、教育の実証科学を標榜する教育社会学者にとっては「道徳教育」は魅力の薄いテーマだったのかもしれない。

もちろんデュルケムによって扱われた『道徳教育論』は心理学的、哲学的アプローチになじまないものではあるが、上述の理由により「四大著作」ほど顧みられることはなかったのではなかろうか。

また、教育学的、教科教育論的なアプローチの「道徳教育論」もあるが、これらは社会学・教育社会学者にとっては、いかにも「規範的」

なアプローチのにおいがして、積極的にかかわろうとする対象ではなかったものであり、その中にデュルケムの『道徳教育論』も埋もれてしまったのではないだろうか。

すなわち、『道徳教育論』における「道徳性の第三要素」が看過されているのであり、この深い考察こそが社会的には求められるのではないかと考える。先述のように、デュルケム自身、第一部では第三要素は第一要素、第二要素と比して簡潔に扱われ、第二部では第三要素に対応する部分だけが欠落している。これも誤解を招く原因になったのであろう。

## 5. デュルケム『道徳教育論』の今日的な社会学的意義

ここで、再び麻生の議論に戻るが、筆者の四半世紀にわたる麻生とのかかわりから判断して、失礼ながら麻生はいわゆる「モラリスト」とはいえないと感じる。その麻生がなぜ若き日に、『道徳教育論』の訳業に取り組んだのか？明治図書版の訳者による「解説」（麻生と山村の共著ということであろう）には次のようにある。

たしかにデュルケムの「道徳教育論」は、西欧に固有の問題に端を発した著述ではあるが、それ自身普遍的な古典的価値を持つことによって、われわれが置かれている問題状況に対しても力強い方向づけを与える。…（中略）…戦後のわが国の道徳的混乱は未解決のまま現在にまでおよんでいる。…（中略）…デュルケムの「道徳教育論」は合理的な一種の社会学的エッセンシャルリズムの立場に立つことによって、戦前のわが国の精神的規定を形成した教育勅語による国家神道の国民道徳論にたいする批判となると同時に、戦後の新教育の中に見られる功利主義的個人主義の立場に立つ道徳論にたいする鋭い批判となる。…（中略）…社会を本位とし、歴史や文化を背景としながらも、深く個人の自

律性、自発性を考え、これを確保しようとするデュルケムの「道徳教育論」は、混乱した今日の道徳教育の現場にあって、ともすれば、目標を見失い、自信を喪失しがちな教師たちに新たな自信と勇気を与えることであろう。

また、山村没後の講談社学術文庫版に寄せられた麻生(2010b)「学術文庫版のあとがき」では次のように述べられている。これは実質的に麻生の絶筆である。

本書が発刊された当時は、戦前戦中の我が国の道徳教育—すなわち国家神道的な「修身」教育—に対する反発が、強く教育界に広がっていた。個人を超越した存在である社会に対する、個人の義務や献身を説くデュルケムの道徳教育論に対しても、同様に根強い反発のある時代だった。…(中略)…ここで論じられている道徳は、宗教に寄り掛かることなく、また、戦前の我が国のように国家にのみ奉仕するものでも、逆に個人の利益追求を偏重するものでもない。それは、子どもたちが広く「人類社会」の存在を認識し、そのなかで自律的な個人を確立するための「合理的な道徳」なのである。ここで語られる道徳論と教育論は、まったくその価値を減じていないばかりか、さらに重要性を増しているのではないだろうか。

と述べている。麻生・原田・宮島(1978)における麻生自身の第一部解説では、「道徳性の第三要素」は、第一要素、第二要素と比べて極端に短くなっているが、やはり「自律的な個人を確立するための『合理的な道徳』」を説くところに『道徳教育論』の価値を見出しているのである。

本稿に続く論稿ではこの問題を具体的に三つの問題、すなわち、今後増加が予測される外国人労働者の子弟の教育の問題と、校則の問題、

いじめの問題を中心に論じたい。(以下、続編)

#### 引用・参考文献

- 青木生子(発行者)(1981)『図説 日本女子大学の八〇年』日本女子大学
- 麻生誠・山村健(1964)「解説」麻生誠・山村健共訳『道徳教育論2(世界教育学選集33)』明治図書, pp.173-180
- 麻生誠・原田彰・宮島喬(1978)『デュルケム道徳教育論入門』(有斐閣(有斐閣新書))
- 麻生誠(1991)「私の出会った学者たち」民主教育協会編『IDE・現代の高等教育』No.327, pp.51-55
- 麻生誠(1995a)『麻生誠教授 経歴と業績』大阪大学大学院人間科学研究科
- 麻生誠(1995b)『麻生誠教授 最終講義録』大阪大学大学院人間科学研究科
- 麻生誠(2007)『大学研究者の履歴書 麻生誠』広島大学高等教育研究開発センター(<https://rihe.hiroshima-u.ac.jp/center-data/researchers-resume/asou/>, 2019年11月19日閲覧)
- 麻生誠(2010a)「真のエリートとは何か」『本一読書人の雑誌一』講談社, pp.47-49
- 麻生誠(2010b)「学術文庫版へのあとがき」デュルケム, E. 著, 麻生誠・山村健共訳『道徳教育論』講談社(講談社学術文庫), pp.466-468
- 石田純(1984)「デュルケム道徳教育論講義(Ⅰ)」『山梨大学教育学部研究報告 第1分冊 人文社会科学系』第35号, pp.151-159
- 石田純(1986)「デュルケム道徳教育論講義(Ⅱ)」『山梨大学教育学部研究報告 第1分冊 人文社会科学系』第37号, pp.82-89
- 石田純(1993)「デュルケム道徳教育論講義(Ⅲ)」『山梨大学教育学部研究報告 第1分冊 人文社会科学系』第44号, pp.177-185
- 太田健児(1999)「デュルケム道徳教育論における共和主義的市民像の問題—A.フイエの道

- 徳論との対比において—』『日仏教育学会年報』第4巻, pp.68-79
- 太田健児 (1999a) 「デュルケム後期道德論における認識論問題—『宗教生活の原初形態』のカテゴリー論と学説史再編問題を手がかりとして—」『日仏社会学会年報』第9号, p.39-55
- 太田健児 (1999b) 「デュルケム後期道德論における認識論問題—『宗教生活の原初形態』のカテゴリー論と学説史再編問題を手がかりとして—」『日仏社会学会年報』第9号, p.39-55
- 太田健児 (2000) 「デュルケム道德論形成における『形而上学』との交換問題—デュルケム対フイエー「社会学的なるもの」をめぐる拮抗—」『社会学史研究』第22号, 日本社会学説史学会, p.77-88
- 太田健児 (2001a) 「デュルケム中期道德論における認識論問題—個人表象の問題を手がかりに—」『日仏社会学会年報』第10号, p.1-18
- 太田健児 (2001b) 「デュルケム前期道德論における認識論問題—道德的事実と倫理工学の射程—」『日仏社会学会年報』第11号, p.95-112
- 太田健児 (2003) 「デュルケムにおけるライツな道德の意味—神なき時代のモラルサイエンス問題—」『尚綱学院大学研究報告』第50集, pp.57-69
- 太田健児 (2008) 「フランス第三共和制期世俗的道德教育論の諸相Ⅱ—モラルサイエンス前史とデュルケム前期道德教育論—」『尚綱学院大学紀要』第56集, pp.135-147
- 太田健児 (2009a) 「フランス第三共和制期世俗的道德教育論の諸相Ⅲ—デュルケム中期道德教育論：生理学的心理学と集合表象論—」『尚綱学院大学紀要』第57集, pp.119-130
- 太田健児 (2009b) 「フランス第三共和制期世俗的道德教育論の諸相Ⅳ—デュルケム中期道德教育論Ⅱ：スピリチュアリズムとモラル・リアリティー—」『尚綱学院大学紀要』第58集, pp.135-146
- 太田健児 (2010) 「フランス第三共和制期世俗的道德教育論の諸相Ⅴ—デュルケム中期道德教育論Ⅲ：『道德教育論』—」『尚綱学院大学紀要』第59集, pp.69-76
- 太田健児 (2011) 「フランス第三共和制期世俗的道德教育論の諸相Ⅵ—デュルケム中期道德教育論Ⅳ：『道德教育論』その2—」『尚綱学院大学紀要』第61集, pp.75-86
- 太田健児 (2012a) 「フランス第三共和制期世俗的道德教育論の諸相Ⅶ—デュルケム中期道德教育論Ⅴ：『道德教育論』その3—」『尚綱学院大学紀要』第63集, pp.59-69
- 太田健児 (2012b) 「フランス第三共和制期世俗的道德教育論の諸相Ⅷ—デュルケム中期道德教育論Ⅵ：『教育学と社会学』—」『尚綱学院大学紀要』第64集, pp.87-100
- 太田健児 (2013) 「フランス第三共和制期世俗的道德教育論の諸相Ⅸ—デュルケム中期道德教育論Ⅶ：『フランス教育思想史』—」『尚綱学院大学紀要』第66集, pp.49-60
- 太田健児 (2014) 「フランス第三共和制期世俗的道德教育論の諸相Ⅹ—デュルケム後期道德教育論Ⅰ：『宗教生活の原初形態』—」『尚綱学院大学紀要』第67集, pp.93-106
- 太田健児 (2015) 「フランス第三共和制期世俗的道德教育論の諸相Ⅺ—デュルケム後期道德教育論Ⅱ：『宗教生活の原初形態』その2—」『尚綱学院大学紀要』第70集, pp.51-63
- 太田健児 (2017) 「フランス思想史の中のデュルケム—神なき時代のモラルサイエンスと社会学—」『社会学論集』第188号, 日本大学社会学研究室, pp.23-36
- 大坪嘉昭 (1980a) 「日本の近代化と国民教育」『北海道教育大学紀要 第一部C教科教育編』第30巻第2号, pp.29-39
- 大坪嘉昭 (1980b) 「道德教育の社会学をめざし

- て一倫理判断の社会学的研究の可能性の検討  
一』『北海道教育大学紀要 第一部C教科教育  
編』第30巻第2号, pp.41-48
- 大坪嘉昭 (1981) 「デュルケム 道徳教育論の  
研究 I—道徳の社会学 I—」『人文論究』第  
41号, 北海道教育大学函館人文学会, pp.1-18
- 大宅壮一 (1959) 『大学の顔役』文藝春秋
- 景井充 (2014) 「デュルケム社会学を根本思想と  
して捉えなおす—デュルケム道徳社会学は何  
を目指したか—」『立命館産業社会論集』第50  
巻第2号, 立命館大学産業社会学部, pp.55-67
- 加野芳正 (1984) 「教育社会学の発展過程—要  
約と結論—」新堀通也編『学問の社会学』有  
信堂, pp.196-212
- 小関藤一郎 (1994) 「デュルケムの道徳研究  
—社会学的研究と哲学の問題—」『関西学院  
大学社会学部紀要』第69号, pp.3-17
- 新堀通也 (1955) 「道徳教育の原理 (第1回)  
—デュルケム教育理論の研究—」『広島大  
学教育学部紀要第一部』第3巻, pp.53-74
- 新堀通也 (1956) 「道徳教育の原理 (第2回)  
—デュルケム教育理論の研究—」『広島大  
学教育学部紀要第一部』第4巻, pp.49-72
- 新堀通也 (1957) 「道徳教育の原理 (第3回)  
—デュルケム教育理論の研究—」『広島大  
学教育学部紀要第一部』第5巻, pp.41-58
- 新堀通也 (1963) 「フランス社会学とデュル  
ケム」『広島大学教育学部紀要第一部』第  
12巻, pp.41-52
- 新堀通也 (1966) 『デュルケム研究—その社  
会学と教育学—』文化評論出版
- スペンサー, H. 著, 三笠乙彦訳 (1969) 『知育・  
徳育・体育 (世界教育学選集50)』明治図書  
出版
- 清田夏代 (1989) 「公教育における道徳教育と  
市民道徳—コンドルセの公教育論とデュルケ  
ム学説の比較検討を通じて—」『フランス教  
育学会紀要』創刊号, pp.19-32
- 田中秀生 (2004) 「【研究ノート】 公民科教育法  
における「権威」概念—デュルケム『道徳教  
育論』について—」『太成学院大学紀要』第  
6号, pp.111-119
- デュルケム, E. 著, 麻生誠・山村健共訳 (1964)  
『道徳教育論1, 2 (世界教育学選集32, 33)』  
明治図書
- デュルケム, E. 著, 麻生誠・山村健共訳 (2010)  
『道徳教育論』講談社 (講談社学術文庫)
- 中村清 (2006) 「デュルケム道徳教育論におけ  
る愛国心の意味」『宇都宮大学教育学部紀要  
第I部』第56号, pp.1-15
- 仲康 (1983) 「J.J. ルソーとE. デュルケムに  
おける根本思想—ルソー『エミール』とデュ  
ルケム『道徳教育論』を主題として—」  
『哲学』第77集, 三田哲学会, pp.55-82
- 原田彰 (2001) 「デュルケムの学級社会学」  
『子ども社会研究』第7号, 日本子ども社会  
学会, pp.83-95
- 平田文子 (2017) 「デュルケム道徳論の舞台裏  
—フランスユダヤ政策課のデュルケム一家  
—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』  
別冊24号-2, pp.173-184
- 藤巻公裕 (2008) 「追悼記 山村健先生を偲んで  
(山村健名誉学長・名誉教授追悼)」『山村学園  
短期大学紀要』第20号, pp.1-4
- 宮島喬 (1977) 『デュルケム社会理論の研究  
(現代社会学叢書)』東京大学出版会
- 森田美芽 (2018) 「デュルケムの教育論」『大阪  
キリスト教短期大学紀要』第58集, pp.1-14
- 山村健 (1974) 「デュルケムの道徳教育論」波  
多野述磨・今野喜清編『価値観と道徳 (現代  
教科教育学大系10)』第一法規, pp.117-130

(やまのうち けんし 神戸大学)